

第七章 残り火が一つ

1

明方近く、梯吉が何か叫んでいた。

左知子は一階部屋に寝ていたのにすぐには目が覚めなかった。まだ、まどろみの中にあり、その声を無視した。体もだるかった。

眼覚めた時は、俄かに雀たちの囀（さえず）りの声が耳近くに聞えた。陽はもうとつくに東の空高くに位置していた。

隣りの室で梯吉がまた大声を出した。

「見ろ、わしの指を噛った奴を捕まえたぞ。やつぱり糠団子の効用だ、これは」

ねずみが金網の籠に入っているのを発見した時から梯吉は枕元に置き、あかずに眺めていたに違いなかった。

左知子も近くに寄ってどぶねずみをつぶさに観察した。薄ねずみ色の体色で、体長は十二、三センチあった。

第一印象を言えば、眼がつぶらで可愛かった。

ただ怯えていて、全身を耳にするというねずみの形容通りに、ぴくぴくと耳を動かし、忙しそうに籠の中を行ったり来たりしていたので、いかにも小憎らしそうには見えた。隙あらば、籠の外に飛び出そうという気構えである。

「よく見てたらな、ねずみの尻尾には、ほれ、うろこのところに三本か五本ぐらいの毛が生えているんだな。すべすべしているのだとばかり思っ

いたからこれは新発見だぞ」

梯吉にとつては恰好の生きた玩具が出来たというわけだった。だが、いつまでも、どぶから這い出てきたようなねずみを、家の中に置いておくわけにはいかなかった。

梯吉もいつまでも見ているのに倦きたとみえて、その日の午後になるともうねずみを処分するよるに言い出した。

「いいから、新河岸川にでも持って行って、籠ごと、川ん中に沈めちまいな。中に石でも入れてな。どぶねずみは水泳ぎもうまいって言うからな。しばらくは泳いでいるかもしれない。人間様の手を噛ったんだからちゃんと罰を加えてやらなきやあな」

まだ、どぶねずみへの憎しみが消えないようであつた。左知子は、はじめからどぶねずみなど家の中で飼う気はなかつた。

だいいち、和彦と美里の新居に向おうとした時、邪魔立てしたのはねずみであつた。

このねずみなのかどうか、はわからなかつたが、左知子とて報復してやる権利は、あるのであつた。につくきどぶねずみには違いなかつた。

昼食を了えたあと、左知子は、ねずみの入つた籠を自転車の荷台に積み、家を出た。

いつまでもこんなねずみに関わっているのは嫌だからさつさと水葬にしてやろうと思つた。

自宅から南に下り、少し行くと三日月橋があつた。全長七十メートルほどもある長い橋でここは車の交通路ともなつていた。

その川の下に、川幅四、五メートルの新河岸川が流れていた。一級河川なのだが、このあたりは急に川幅が狭くなつていて、水の流れが滞り、どぶ川の観を呈していた。

両岸は草地で、今は夏草の猛る地帯になつてい

る。左知子は自転車を手で押し、川っ縁に下りた。ほとんど水は流れのかたちをとっていない。工場排水が流れ込むせいか、川面は今にもメタンガスを噴き出しそうな汚なさである。河原に下りたら、子供たちが寄って来た。

「わ！ねずみだ」

「ね、これ殺しちゃうの」

「かわいそう」

「だけどこいつ気味悪いや」

口々にそんなことを言いながら子供たちは自転車の荷台にくくりつけられたねずみとりの籠を覗き込んだ。

「そうよ。このねずみ、人間を噛っちゃったから死刑にするの」

「わー、凄え」

「今から川に投げ込まれちゃうんだ」

「早くやんなよ」

男の子ばかりだったので、逆に左知子は煽られた。ねずみ捕り器に閉じ込められたどぶねずみが、危機を察してか、籠の中で暴れていた。

が、その時、河原の緑草地に沿って、桑原源吉がステッキ片手にやって来た。

考えてみればこの三日月橋と桑原源吉が住んでいるに違いない月吉団地とは、ほんの眼と鼻の先であった。

とつぜん現われたのではなく、この新河岸川沿いの道は、散歩道の一つなのかも知れなかった。

子供たちと騒いでいたので左知子は桑原老人が近付いたのに気付かなかった。

至近距離二十メートルほどで、その姿をみとめた。急に、左知子は自転車を動かせ元来た道へと戻り始める。ちらと目にとめた時、嫌な気分になった。また、つまらぬ印象を持たれてはかなわなかった。だいいち、口をきくのも億劫（おっく

う)なことであつた。

「おーい、その女、待て待て。わしの顔見て逃げ出すことはなからう。またよからぬことをお前企んでるんじゃないのか」

桑原源吉のステッキの先が左知子に向けられていた。足を早める。背を向けていた。

子供たちも足早に、自転車のあとをつけた。

「ね、ここじゃ死刑にしないの」

「ぼくに、このねずみちようだいよ」

まったくうるさいことだった。

「だめ！かわいそうだからもう止めたのよ」

「なーんだ。つまんねえ」

そんな子供たちの声をふり切り、道のない草地の坂を左知子は自転車を押しながら登った。

草いきれのするこのあたり一帯はまだ夏の強さにむせ返っている。

だがどう見ても桑原老人の眼にはこそそそと逃げて行く女に思えたはずだった。

どうも初めからこの老人とは相性がよくなかった。左知子を不幸に陥れるために、いつも影のように付きまとっている気にさせられる。

結局、左知子は、どぶねずみを始末することが出来ず、また家に持ち帰った。

部屋に入れておくと、梯吉が何か言いそうだったので、左知子は勝手口の傍らにそのまま出しておいた。

帰って来る道すがら、どぶねずみを始末するいい方法を考えついた。

ただし、その方法を実行するには夜まで待たねばならなかった。

左知子は二階部屋で昼間はおとなしくしていた。どぶねずみを始末する時、拓郎も誘おうと思つた。いつ電話しても拓郎は家にいなかった。

やつとねずみを捕えてから三日目、拓郎と連絡がついた。次に、夕方、買物に出たついでに左知子は、葉崎樹里の母親に電話を入れた。

「なんですか。いくらかのものを買って頂きたいと言うことですか。貴女の言う前任の方ですがね、樹里とは別に何もなかったということですよ。なんだか言い掛かりのようにも思えますけど、ほんとうに樹里が貴女の言うようなことをしますかしら。なんとたつてまだ子供ですよ」

「子供ってことありませんよ。週に二度とか三度は、お母さん、あの子に自慰を許しているんですよ」

「あのね、電話だからいいけど貴女ずいぶんなことを口にしてるのよ。はっきり申し上げれば、樹里はね、貴女のこと頭がおかしいって。何でも、呪いの人形とか何とか言つて火付けの神様にお祈りしなさいって貴女言つたんですって。羽郷さんちが燃えたらいいなんてそれどういふことですか？それでなくとも今川越の街は放火騒ぎがあるのよ。樹里はね、勘のいい子だから、火付け犯人はサッコ先生だつて……ほほ、ごめんなさい、これは子供の言うことだから」

「そんな話、わたしに関係ありません。とつぜんクビ切られたんですからその補償をして下さいと言っているだけです」

「あらそう、わかりました。こんなもめごといつまでも嫌ですから一月分はお支払いするわ。それでいいんでしょう」

「そうなさりたいならそうなさつて下さい。わたしはどちらでもいいんです」

「ともかく、そうさせてもらいますから」

そんな電話のやりとりをしたらまた不快な思いを抱くことになった。それだけに、この夜の左知子は、火を付ける行為に特別な気持の昂まりを持

った。錆びた金網の籠の中で、どぶねずみはもう観念したのかじっとしていた。四六時中餌を漁る習性があるぐらいだから、絶食状態におかれた今、体を動かす元気がないのも無理はなかった。

2

この夜、午前一時、左知子は自転車の荷台にまたねずみを捕えた籠を乗せ、真夜中の街に出た。余り父の視線は気にならなかった。

左知子が出て行くのを父だつて待っているのだつた。これはお互いがお互いを赦し合つたことだと自分に言い聞かせた。

左知子はこの夜、ベンジンを肩に背負つたナツプザックに入れていた。

ほんとうなら、和彦と美里の家に直行するはずだつたが、先ず、拓郎の家を訪れた。

窓明りがあり、ほっとする。二人の間には約束が出来ていて、とんとんと二つ扉を叩く時は左知子だということになっていた。すつと扉が開き、左知子は抵抗なく中に入ることが出来た。

「ね、アイヤージェーム、今夜は特別のショーがあるの、わたしに付き合わない」

「ああ、ぼくずっとあんたが来るの待つてたのに。電話もして来ないしき。それでサトウつて家、六軒町探したんだけど、結構同じ名があつてさ」

「いいの、いいの、詮索はなし」

「あいつ、ぶん殴つてやつたからね」

「どう、気分よくやれたあ」

考えてみれば、田尻義和に制裁を加えたあの日から二人は会つていなかったのだった。

「思いつきりさ。サトウエツコの怨みを思いしれつて」

「勇ましいのね。そのお札に今夜は特別ショーに

ご招待するわよ」

二人は、外に出た時はもう声をひそめた。

一台の自転車に二人で乗った。左知子は後に乗り、ねずみの入った籠を手に持った。

「これ、わたしたちの夜食よ」

「やだな。ねずみなんて」

「何言ってるの。まあ、ねずみ花火の一つだと、思えばこれからのこと結構楽しみが湧いて来るわよ」

拓郎の家に来る途中、左知子は恰好の今夜の舞台を見つけ出していた。

中原町と六軒町との境目になる道路際で新築中の家屋を見つけた。

前は草地だったのにきれいに整地されて、そこに木組が立ち、四DKの造りとおぼしき建造物が形を現わした。

敷地は三十坪せいぜいだから小さな庭がやっと用意出来る程度の住宅である。まだ棟上げが終ったばかりで、全体の印象は骨組ばかりの瘦せた家といった観がある。

夜空を見上げると、棟上げの時にしつらえたらしい一張りの竹製の弓矢が、二階家の屋根組みの上で睨（にら）みをきかせていた。矢の先は見上げている二人の方角に向けられている。

「上棟式か、これからの建物の無事を願っての、これ儀式でしょ。そんなの役に立つのかしら」

自転車建物の陰に入れ、ねずみの籠を手に左知子は、木の香のする建物の中に入った。

拓郎もついて来た。一階部分は、それでももう床板が張られていた。階段もついていた。

火を点けるのに格好な建築資材も、部屋の間取りの隅に少しばかりだが積んであった。

「まあ、坐ったら」

「うん」

「あのね、わたしの願いきいてくれたら前よりもっとうまくキスしてあげる。お互い秘密を分け合った同士だからね」

「もしものことがあるばというこの前のハナシのこと」

「あれはもう、盟約済み。今度のはお願いよ。わたしの願いをきいてくれる？火を付けて欲し家があるの」

薄暗いので相手の顔ははつきりとは見えない。

一瞬、拓郎は黙った。

「わたしと近すぎる関係なの。すぐ、わたしが疑われてしまいそうなの。わかるでしょ？」

「うん、サトウエツコがふられちゃった男とか」

「ほ、まあそういうことにしておきましょう。それでやってくれるの」

「このところ、ちよつと欲求不満だし」

「よかったあ。いい、仙波町三丁目の弁天橋の近く、斉木和彦って言うの、そう新河岸川寄りの新築家屋よ」

「斉木和彦？」

「そうよ。わたしがアリバイをちゃんと作って置いてから決行よ。その日はわたしが指示するわ。ここまでもう言っちゃったんだからやってくれなければだめよ」

「わかったよ。やればいいんだろ」

「結構、頼りになるのね。それじゃ、お願いをきいてもらうんだからキスしてあげる」

この夜の左知子は少し大胆に振舞った。

拓郎を木の香のする床の上に押し倒した。

体の上におおいかぶさり、ぴったりと体を合わせて濃厚なキスをした。舌先も唇の中に分け入れる。だがやつと舌は入った。

拓郎はやはり体を硬くしていて歯を喰いしばっていたのだった。ここで左知子が試したのは、拓

郎の女性に対する感応度だった。

左知子は自分の下半身を、拓郎の下半身にぴったりと密着させていた。拓郎の男のものが勃起するかどうかを知りたかったのである。

だが、ディープキスにしても、彼自身のものは熟くはならなかった。どこかに欠陥があるのか、左知子の探った限りでは勃起の状態を示しては来なかった。

で、左知子はキスのあそびを止めた。

「さあ、拓郎のものが力強くなるようにファイヤーゲームをしてあげるわ」

いつか、火を付けたあとに電柱の陰で自慰の行為に耽っていた拓郎の姿を左知子は思い浮かべていた。

左知子はファイヤーゲームの準備にとりかかる。床板の隅っ処に、持参して来たベンジンを壇の半分ほども、ごぼごぼと音をさせながらこぼした。そこがマークポイントであった。

「ね、ねずみの駆けっこだろ」

「あら知ってるの、でも走るだけじゃないわよ」

「少しはわかって来たよ」

「それじゃ手伝って」

左知子は、ねずみ獲りの籠から、運んで来たどぶねずみを取り出す。

梯吉が「ねずみつてのは背中んところをぐいと掴めば大丈夫、噛み付きやしないよ」と言ったのを思い出し、しっかりと背中を押さえ込んだ。

ベンジンをねずみの全身にふりまく。

ひよことは違ってねずみはじっとしていなかった。背を押さえつけられた時、床の上を駆けようとしていた。逃げ伸びることだけにねずみの全神経は向けられている。

「いまから火をつけるんだ」

と、この場の状況を読み取り拓郎が言った。

「この家が燃え上ればお楽しみってわけ」

左知子はそう言い、マッチを取り出した。

「さあ、あなたも参加するのよ。このねずみの背に火を付けて」

マッチを手渡す。

どぶねずみの長いひげが床の上にこすりつけられている。左知子は、ねずみの四趾（しし）が、しきりに土を搔いているのを見た。

逃げようとする方角にはベンジンを大量に流したマークポイントがあった。

拓郎は臆（おく）せずマッチを擦り、どぶねずみの背に火を近付けた。

すでにベンジンの香気が立っていた。

ねずみの全身にぽっと火が移る寸前に、左知子は手を離した。

それでも、もうねずみは全身火達磨（ひだるま）になっていた。その素早さは、ひよこの時とはくらべものにならなかった。

一直線に、火矢そのもののスピードで、一匹の生き物は次のマークポイントに火を運んだ。

突っ走り、瞬時に、また火の手が上がった。

引火性が強いだけに、あっという間の火の結末となっていた。

ファイヤーゲームは数秒のうちに完成していた。火達磨になったねずみはどこまで突っ走って行ったのか、それすら見定めることが出来ないほどのこれはスピードゲームだった。

それだけに、火の回りも早かった。

木の香が焼け焦げた匂いに変って行く。

左知子はいつかの木材置場での火のシーンを思い出した。床板を舐めた火は、白い木肌が剥き出しになった板壁に移ろうとしていた。

ふと、左知子は火に炙り出された拓郎の横顔を見た。熱中ぶりに目をやった。

いつかの、放心したていの表情になっていた。

左知子はもうこの場から去ろうとしているのに、拓郎はまだ体を固くしたまま、板の間に突っ立っていた。

左知子は、もう逃げるべきだと思ったが、拓郎に身を寄せた。口づけしてやるふうを装って、拓郎を抱き取る。立っている時の彼は背が高く、釣合いはとれなかったが、左知子は下半身だけはっきりと擦り寄せた。

たしかに、拓郎のそれは盛り上っており、男の欲情をそこに示していた。もう、拓郎は、自分の楽しみの行為のことを考え始めているはずだった。なにより、隠しようのない興奮状態にある。

左知子は、いつかの樹里の時のように、指で、愛撫してやることを考えた。

が、予想していたより、火の回りは早く、壁に伝わった火はもう天井のほうへと炎の先を立てていた。

「さあ、逃げなきゃだめよ。逃げるが先の展開になっちゃったみたい。ここはすぐ表が車の通る道なんだから、発見されちゃう」

左知子が急きたてた。やっと、彼はわれに返った。左知子は彼の手をとり、表に飛び出した。

「一緒にいちゃまずいわ、わたしは右、あなたは左よ」

自転車を引き出し、左知子は飛び乗る。

「それじゃね、明日また誘いに行くわ」

「ぼくはもう少しここにいろよ。せつかく燃え上ってきたんだもの。屋根の上まで火が上ればこれはちよつとした見ものだよ」

その点では、拓郎のほうが度胸がよかった。

左知子は一人残ると言い張る彼をおいてさっさとその場をあとにした。

ちらと、拓郎の欲情の処理の仕方のことを考え

た。わたしがいては邪魔なのかしら？と、自慰に耽る時の彼の顔を思い浮かべた。

それでも気になって、火事の現場から七、八十メートルも離れた地点で、一度、自転車を止め、後を振り返った。

その時、嫌なことを思い出した。

このまま家に帰るとまた父が、二階の間に忍び、妙な女装のあそびをしているのではないかと考えたのだった。

それで足が鈍ったそれでたまたま通りかかった幼稚園と続きの小公園に入り、自転車を木の繁みの中に隠した。

そのうち、消防車がやって来ると思った。

高いけやきの樹が一本、公園の隅には立っていて、こんもりと茂った樹葉が、わさわさと風に揺られていた。

あるかないかの風だったが、高い梢にある樹葉は敏感に風の動きを捉えていたのだった。

空が暗いだけに、あたりには何もなくて、このけやきの樹だけが一本、左知子の眼の前にあるような錯覚に捉われた。

この天の高さまで、火が上れば壮大だろうなと左知子は勝手なことを考えていた。

間もなく、消防車のサイレンがあちらからこちらから湧き起り、ひっそりとしていた夜の静けさが打ち破られた。

しばらくはまだじっとしていたが、五、六分もたった頃、火事の現場をたしかめに行くのか、二人、三人の男たちが走ったので、左知子は小公園を出た。火事見物の人の列に紛れ込めば……と左知子は考えた。

再び、火事現場に戻った時、もう、火は半ば消えかけていた。が、その代り、壮大ともいえる消火シーンにお目に掛かった。

火は粗組（あらぐ）みの二階まで達していたが、二階の屋根までは届いていなかった。

それでも、消防車がすでに三台も現場には到着していた。何人かの男たちがそばを擦り抜けて行く。白い影になって吸い寄せられて行く様が面白い。どこから湧いたのか、二十人余りの野次馬が集まっていた。

屋根の上あたりまでホースの水が浴びせられていたが火はもう消えかけていた。白い煙りが立ち昇り、木の焼け焦げた匂いがした。

勢いよく水が放射されていた最後の一本が、「放水止め！」の号令でまたたくまに力を失なった。途端に金属製の筒先は力を失なう。

白い水の飛沫は筒先に吸い寄せられてしまった力を失くした男性器のようにも見えた。

何だか、左知子は力のない終演のショーを見せつけられた気になった。

壮大な火のかがりを期待したのに、新築家屋の白い木枠は、半分ほど焼けず、ぽたぽたと水を滴らしていた。期待外れだった。

野次馬の中には拓郎の姿はなかった。

どこかの至近距離の闇に潜み、彼は自分だけの楽しみを見つけ出しているのだろうか。

左知子もこの場を去った。

まだ火事現場のあたりは騒々しく、遅れ馳せに何台かの消防車がサイレン音を吹鳴（すいめい）させながら、現場に到着した。

ところで家に帰ると父が高熱を発し、苦しんでいた。それで、家にいないことに散々、悪態を吐かれた。

「おまえ、毎晩のようにどこに行っているんだ。」

いいかげんにしろ。親が高い熱出しているのにそばにもおらん、えっ、いいかげんにしろ」

額に手を当てるたたしかに熱くなっている。氷でタオルを冷やし、梯吉の額の上へのせた。

「いいかげんにしろ」と、二度も口走ったことに左知子はこだわりを持った。

。毎晩のように……。それは先刻、左知子のほうも承知のことだったが、どうやら思わず知らず父は不満にことよせて、左知子の夜の彷徨のことを口にしてしまったようだった。

「ねずみはどうした？これはあいつの祟りかも知れんな」

「あのねずみならもう新河岸川のどぶの中に捨てたわよ。お望み通りにね」

「噛まれた指先が、痺れていて、神経がやられているのか痛いんだ」

言われて指先を見たら、熱を持ち赤く腫れ上っていた。

「これは何とか言うんだ。その、ねずみに咬まれるとな……」

夜中で医者を呼ぶわけにもいかないので古い家庭医学書を持出しその項をめくると『鼠咬症・スピロケーター』と記されていた。

噛まれて二、三日経つと高熱に襲われるとある場合によっては患部は指が曲がってしまうとも書かれてあった。

だが、そのことは父には話さなかった。

ただ、熱の下がる常備薬をのまし、せつせと頭を冷やしてやる。

翌日、結局、医者に行き、事情を説明して薬を貰ったが「近頃珍しいことだ」と言われただけで、二日目の夜も、父の熱はさして下らなかつた。うとう、一日中、朝から晩まで、夜中に至るまで父の看病をやらされた。

熱があるので、食欲不振だったが、娘にずっとそばにいて貰うのが嬉しいのか、案外と、梯吉は機嫌がよかった。

ところがこの夜、左知子の知らないところで、シヨツキングな出来事が起きていた。

古い板壁の家の一軒に、山岸拓郎が火を付け、近くにたたずんでいるところを、近所の人に見付かり、通報されて、任意取調べのかたちで川越署に出頭させられていたのだった。

板壁の破れ目に新聞紙を押し込み、火が付けられたので、一部を焦がしたただけだったが、狭い路地の奥だったので、状況証拠としては山岸拓郎の放火犯罪は動かし難いものとなっていた。

その話は、隣家の田尻に教えられた。手招きされ、板塀越しに耳打ちされた。

「放火犯がどうやら捕まったらしいよ。二浪している若い男だっというけど、ね、まさかあんたが夜中に通っているという恋人の男ではないだろうね。サトウエツコっていうのがその男のさ、相棒らしいんだけどね」

「わたしとはなんの関係もないのでは」

「はは、何もかも知っているわけじゃないが、たぶんそういう話だと思うよ。匂うってやつだな。火のないところに煙は立たないって言うだろうが。ね、それからお宅の立退きの件、わたしは悪いようにはしないつもりだよ。梯吉さんもあんたも、頑固だからね。ともかく一度は人手に渡さなきゃ、ここは治まりがつかんのだよ」

「はあ、わかりました」と、だけ左知子はその時答えた。男を無視した。

「ところでどうだ。仕事場のほうなら夜は誰もいないからね。あんたには貸しがあるよ。なーに、別に嫌らしいことでも何でもない。若い娘さんがセックスもしないでいるなんて体にも悪いと思う

がね。ねえ、ほんと、今夜、仕事場で待ってようか」

「結構です。わたしはあなたには何の借りもありませんから。変なこと言わないで下さい」

「いいのかね、そんなこと言って」

左知子は、さっさとその場を離れた。

まだ男は未練がましく何か言っている。

逮捕されたのは山岸拓郎に違いなかった。

その日の夕刊には、小さな記事だったが、連続放火犯逮捕か！と出、浪人二年の川越市内の某と名が伏されていた。

約束だと、この夜、拓郎が連続放火犯でないことを知らせるために左知子自身が支援の火を灯さねばならないのだった。

それも、耳目をそばだたせるに足る派手な火を用意すべきであったのだ。

だとしたら……左知子は、仙波町の和彦と美里の新居をターゲットとすべきであった。

拓郎が逮捕された以上、その場所に火を放つ代りの者はいなくなっていた。

が、この夜、家を出ようにもまだ熱の高い父が臥（ふ）せっていた。

夜半十二時過ぎ、左知子は一度は外出の機会を窺った。少しは熱が下ったのか梯吉はまたテレビをつけっ放しにしていた。どうせ、夜の彷徨者であることを知っているのだから、いつそのことに表に飛び出そうかとも考えた。

だが……この時、左知子は、拓郎を裏切ることを考えた。これから自分が火を付けなければ、もう連続放火魔はこの街から消える。

だとしたら、これまでの数々の放火事件のすべでは、山岸拓郎だとされる可能性もないではない。今夜、火を付けなければ……これからも火を付けなければ……少なくとも、これまでの自分がや

つて来た放火の一つ一つは、不問に付されることになるのか？とも考えてみた。

自分のことを薄々と知っている隣家の男、それから、山岸拓郎の場合はどうだろう？

自分の名はサトウエツコでどこに住んでいるかは知られていない。

だが、サトウエツコの正体を知る方法はいくらでもある。拓郎が変な女とのことを警察に告げ、田尻義和殴打に手を貸したことを告げれば、間違いなく身元は割れるはずであった。

問題は、拓郎が、サトウエツコのことを警察に告げるかどうかであった。

彼女が、今福の持家火災の真相を語れば、拓郎の場合、放火・殺人の罪が加わる。

その火災では人が二人も死んでいるのだ。

サトウエツコのことを拓郎がしゃべるか、しゃべらないか、そればかりは左知子にも推断のつかぬことであった。

結局、左知子は、拓郎との約束事を守るのを止めた。忠実義務を放棄したのだった。

が、これはまったくの偶然であったが、その夜、中原町と隣接した六軒町二丁目で火事があり二軒に類焼して明方になって鎮火した。

すわこそというので警察が現場にとび、調査した。一応のところはまだ不審火ということになり、放火とも過失とも判断がなされていなかった。

中華料理店で、台所の火の不始末説もあったが、放火の疑いもあったのであった。

左知子は、拓郎との約束を無視して知らぬ顔を決め込んでいたのだが、この偶然に発生した火事で、図らずも、拓郎との盟約・忠実義務事項を果したことになった。

ところが、この夜、午前一時過ぎに、例の金融

屋の男から最後通告の電話が入った。

「いいか、期限は明日の夜、午前零時までだ。翌日はもうお前たちの家ではないんだからな、何をされようと文句はいえんぞ。八月三十一日がついさつき、もう今の時間は九月一日だ。ほんとうなら今からだってお前たちを叩き出しに行けるんだがな、夜中に近所を騒がしちやまずいだろ。これでも紳士的にふるまっているつもりだぞ。おまえんとこの、口だけしか役の立たない親父にもよく言っておいてくれ・いいな」

すっかり、左知子は家の立退き問題など忘れていた。明日から父娘ともども表に放り出されるのだと考えたら急に気が変になった。

父親の系累には縁者はない。

母親の兄弟などは借金の肩代りを求められると思つて寄りつかない。左知子には相談する相手は誰れもいなかった。

どうしてこんな危急の時なのに和彦の顔が思い浮かぶのか？

左知子は無性に和彦に電話が掛けたくなつた。

だが、我慢した。

この限りでは、まだ充分に左知子は正気なのだつた。それに梯吉が、また左知子を呼びつけた。熱があるので、指が痺れると言つた。

その指を氷で冷やしてやる。とうとうこの夜も、左知子は父親の看病をして過ぎた。

「なあ、お前がいてくれるから、わしはこれで生きて行けるようなもんだ。娘でよかつたよ。これが男坊主ならもう天涯孤独の身になつたような気になるだろうな。頼むから左知子、どこにも行かんでくれ。ほんとうはな、お前がわしを置いてどっかに行っちゃまうんじゃないかとそればかりを心配していたんだ」

左知子が望んだわけではなかつたが、これで二日

、父と娘は何となく心を分け合ってきた。

熱はもうほとんどないのに、何だかんだと用を言いつけるのはそれだけ梯吉がわが娘に甘えていたからであった。

二日も家に閉じ込められていると段々と気が滅入って来た。それに、午後、予告どおり金融屋の男と不動産の男の二人連れがやって来て、

「あんた方のためにアパートを用意してやったよ」と、東田町の田んぼの多い一郭にあるアパートの場所を記した紙片を示した。

「その何だ。親父さんは別に戸板で運ぼうってわけじゃないんだからな。もう、ここはドンの詰まり、トラブルは無しにして貰いたいよ。ともかく、十日後には取壊しの手配をしたんだ。どかいブルドーザー用意したから、あんたも大変だろうけど、荷造りはちゃんとしておいたほうがいいよ」

妙に親切なものの言い方になっていた。

十日間も余裕があるのも解せなかった。

あれだけ急ぎ立てて おいて今更、何の恩を売ろうというのだろう。何でも悪いようにしか左知子は考えられなくなっていた。

この日の夕刻、左知子は和彦の家に電話を入れた。また運悪く美里が出た。

「和彦にさ、わたしマフラーを編んであげたのよ。それがさ、この前手渡そうと思ったのに約束の場所に来ないのよね」

「ねえ、何のこと？」

「とても寒い日でね、雨が少し残っていて、わし可哀想な女の子ってことになってしまったの」

「あの、和美が泣いている……」

たしかに受話器に赤ん坊の泣く声が伝わっていた。

「ちよっと待って」

「ああ、どうして、こんな時に、赤ん坊まで邪魔するんでしよう」

受話器に向って独り言を呟やく。

何だか和彦と美里のことを考えるといつも気持ちの均衡を失なった。

たとえば……美里と和彦をひよこに見立ててフアイヤーゲームをやってみれば、囀（おと）りのひよこ役の美里の火達磨姿を見て、和彦は真直線に火の輪の中に、飛び込んで行くだろうかなどと考えてみる。

（救けて！和彦！とでもわたし叫ぼうか！救けて欲しいのはわたしのほうよ、美里、あなたわかつているの！何が和美よ、赤ちゃんだけに尊いのちがあると思っっているの！）

悪意の文句を、左知子が頭の中に用意していると、やっと、再び美里が受話器を充てた。

「ごめん、ごめん、お母さんになるともうたいへんなんだから」

美里は受話器を握ったその端からまた赤ん坊が泣いた。

「やーね、ほら、火が付いたみたいに泣いてるわ。燃えちゃうかもよ」

左知子のほうから、乱暴に電話は切った。

この日、梯吉の熱は下がり、少しは機嫌がよくなった。愚痴話を聞かされる。

「まったく、ねずみの奴の崇りさ。どうも夢見が悪いと思ったんだ。手を噛られた時にな、その何だ、変な夢を……いや、まあいいや、ともかくねず公の奴、なあ、ねずみは昔から家を守るというのに恩を仇で返すようじゃな」

このあとも、何か言いかけたが、梯吉は口を喋（つぐ）んだ。

この夜は、情報屋の北川洋子からも、電話が掛

かつて来た。

「ね、山岸君、放火犯で捕まってるの知ってる。うちの弟んところね、刑事さんがやってきてあれこれ訊いて行つたんだて」

「なによそれ、わたしに関係ない話よ」

「あら、左知子が彼のこと根掘り葉掘り訊いたからわたし教えてあげたのに。これ左知子のほうが関心を持つていいはずなのに」

「もう興味ないの」

これまた素っ気なく電話を切った。

山岸拓郎は警察で、何を、どこまでしゃべったのか？やはり気になった。

少し気の弱い優等生タイプの性格だから、厳しい取調べを受けたら、サトウエツコ三ツ子という女のことを告白してしまうかも知れなかった。

空は曇り空で、余りはつきりした天気ではなかった。早速、秋の初めを知らせるように小糠雨がひとしきり降った。

もつとも地面をすっかり濡らすほどではない。むしろ、霧が立ち込めているといったふうの眼には見えないほどの細い細い雨だった。

この視界をせばめて来る秋の雨の気配に、この夜、左知子は自分自身の思いの幅もせばめて行つた。

正気の部分が少しずつ失なわれていたのであった。二階部屋の窓から表通りを見ているうちに、陰気な街の夜がますます赦せなくなつた。

いかにも古い家々の屋根である。

雨はもう止んでいた。

いつかの時の、鐘の塔の下で和彦を待った時と同じ状況にあった。あの、時鳴鐘ときなりかねに火が付けば……これで何度目の火災焼失ということになるのか。

今夜、あの場所に和彦を呼び付けてから、時

鳴鐘には火を付けようか。

それでも和彦が焼殺されるわけではない。

だったらいっそのこと、和彦をあの時分の鐘の四つの支柱の一つに縛り付けておいて火を放とうかーいやいや、それでは和彦だけしか罰を受けない。美里も、一人の間の赤ん坊もみんな同罪だ。

このように、明確に話の順序が追われていたわけではない。前々から考えていたこととか、諸々のことが一つになり、この夜の左知子の行動基準を作り上げたのだった。

この夜の左知子は堂々としていた。

いやたぶんに狂っていたのだが、なんら動ずるところがなかった。

この夜の異変についていえば、さわら垣の家の犬がやたらに吠えた。

それに呼応するように、犬の遠吠えが夜の闇には伝えられていた。

それから、さつき二階家から表を見た時、隣家の植込みの陰でちらと人が動いた。

が、いずれも左知子は気に止めてはいなかった。午前一時数分過ぎ、左知子は自転車に乗り、川越の街にさまよい出た。

なぜかこの夜は中天が重く閉ざされているふうに見えた。まだ雨雲がどこかの遠くの空にとどまっていたのかも知れない。

空の間になる地平の涯に黒い雲がおおいかぶさっていた。左知子の頭の中には、いまでも定かならぬものが去来している。

左知子は元町一番街の時の鐘に向っているつもりだった。たしかにその場所には和彦が待っている：あらぬ思いだった。

言うなればこの寒さにはマフラーなどあれば大いに相手に喜ばれることになるのであった。

もしかしたら左知子は、もう編みあげたマフラーを胸に自転車を走らせているのかも知れなかった。

そのくせ、陰々滅々の鐘の音を聞くのが恐いのか、自転車を走らせている方角はまるで逆であった。むしろ、左知子は時鳴鐘から遠ざかっていた。

知らず知らずのうちに足は仙波町の和彦と美里の家に向っていた。かなり遠い距離である。

三光町から中原町を経て新富町の郵便局前を通り、喜多院の東照宮側に通じる一本道を東南側に曲がるようにして下って来ている新河岸川を目指した。

およそ、自転車を走らせて三十分はかかる。

途中、小さな雑木林があり、わずかに風に揺れていた。ひととき、騒がしく鳴き立てた田んぼの蛙たちも、今夜は妙に静かだった。

稲穂は伸び切って、青々とした稲田が新河岸川の向うでは波打っていた。

だが、いずれも暗い風景には変りない。

どこもかしこも押し黙っていた。時折りには、農道のはるか向うにある有料幹線道路を、右に左にと、ランプの明りだけを灯した車が通過して行く。みんな感情がない。

左知子は弁天橋を目標にしたが、河沿いにはすすまず、小路に紛れ込んだ。

前々から見知っている美里の家だった。

庭の隅に建てたという、新築の家の造作のことは、まだ、左知子は目にはしていなかった。

正気の部分は残っていたとみえて、自転車を一先ず、弁財天のある林の中に隠した。

そこからは徒歩で五、六分の距離である。どこかの犬が吠えた。人の気配を感じている。あの、角のさわら垣の家のうるさい犬のこと

を思い出した。

。帰りにあの犬小舎に火を付けてやるから！
もうわんとも鳴けないようにね。いましばらく
のことよ。

左知子は吠えている犬共と美里一家のことを
、混同していて、大真面目にそんなことを考え
た。正気でない部分もあった。

風防用にネズミモチの垣が作ってあるのが美
里の実家だった。高さ二メートルほどもあり、
竹がわたしてあって、きちんと横に長い長方形
に樹の葉先は切り揃えてあった。

暗い庭先に入り込む。

古い家だから納屋などもあり、柿の樹なども
かなりの大樹であった。

和彦と美里の新居はすぐにわかった。

二階建ての家屋で、誰れの好みかこのあたり
には珍らしく青い屋根瓦のしやれた造りであっ
た。庭の隅ではあったが、広い敷地内なので、
たつぷりと庭もあることになる。

背中にナップザックを背負った左知子はすで
にこの時点で挙動不審者であった。

やはり、ナップザックの中には、引火性の強
いベンジンが入っていて、放火犯の条件を充分
に揃えていた。

左知子はあたりを注視する。

午前一時半にはなっていた。

あたりはいやに静かであった。

一階、二階とももう雨戸がしっかり閉められ
ていて、和彦も美里も、赤ん坊も、安眠のさな
かにあるように思われた。

白っぽい壁が両脇にある玄関の扉は、いまは
やりのデコラチックな彫刻で飾られている。

玄関の踏台の両脇に、鉢植えの赤いガーベラ
が咲いていた。

その他にも、デージの白や、名も知らぬユリ科の花などの鉢が置かれていた。

左知子は裏口に回った。そちらは背後に小さな竹藪があった。

裏に回ってみて、はじめて気付いたことだったが、新建材が使われていて、何だか便所の窓も、浴室の窓もスチール製の格子が嵌っていて堅牢な備えになっていた。

火を付けるとしたら……。

裏口ではなく横手の居間側であった。

左知子なりにこの場の状況を読んだ。

そこには陽除け用の大寸のすだれが立て掛けであった。一階の屋根部分までのよしずで、一夏越したのでよく乾いていた。

一階の屋根は瓦だったが、その下は木組のはずだった。建物自体は構造的には燃える部分もありませんでした。

ここまで夢中でやって来たので、今が何時頃なのか、左知子は気付いていなかった。

ともかく、火の柱が夜空に立てばいいのだった。山岸拓郎が捕まってしまったのだから、この行為をやり遂げるのは自分しかないかった。

左知子は定めた目標物の前で、しばし、天を仰いだ。よしずの直線状の高さは、それでも、小柄な左知子には、天にと駆け昇る火の架け橋とも見えた。

川越大火の時のあの火の猛りを活写した記文の一節も左知子の頭には甦った。

もう一度、和彦に言って聞かせる気分にも左知子はなっていた。

『…折ふし北風強く、スワ火事よと騒ぐ間に五六軒焼き煽りて南町の中央に抜き出て火勢尚ほ盛んなるに、二十二組の消防夫は必死となりて消防に尽力する内、多賀町にある共鐘堂の屋根に燃移り、夫（それ）より火の子は八方に飛散して全市街一面にかぶり、火の手は数カ所に別れて火焰天に漲り猛威を逞ふするも、数十台の吐水、卿筒（きょうとう）一台あると雅（いえ）ども、矮小（わいしょう）の故に用をなさざるが為め、殆んど消防の力も絶えたるに、一方は南町を焼き払って多賀町、鍛冶町、上松江町、本町、猪鼻、連雀町と延焼し、尚ほ尻火にて江戸町を焼払ひ、又横火にて下松江町より相生町、久保町に延焼し、その他志義町、高沢町、南久保町、北久保町等都合十六町悉（ことごと）く焼失し、寺院は広運寺、林溪（連馨）寺、法禅（善）寺、長慶（喜）院の四箇寺、電信局及び劇場松蓮座も類焼し、焼失全戸数千三百五十戸、土蔵六十棟にして、翌十八日午前五時漸（ようや）く鎮火し…』

これは明治二十六年三月十七日の川越大火の模様を写したものだだったが、左知子はこの名文が好きで誦（そら）んじていたのだった。

なにやら口の中でぶつぶつ言いながら左知子は、ナツプザックからベンジンを取り出し、そしてマッチを手にした。

真赤に燃え上る火の柱をいつまでも見ていようと 思った。天をも焦がすほどの壮大なかり火ならなおいと考えた。

紅蓮（ぐれん）の炎の中でどんな火車地獄図が展開されようとも知ったことではない。

熱気に体をさらせば、下腹部の病巣部に棲む

嫌らしい貌（かお）をした虫共が炙（あぶ）り出されて、ぼろぼろと体の外にこぼれ出すのかも知れなかった。

きつと小さな小さな虫共は無数の針のような織毛（せんもう）を持っていて、時に左知子の病巣部をその痛い針でちくちくと刺すに違いなかった。

それなら火で焼いてやると左知子は思った。

そのためならいつまでも、熱風の立つ、火の柱の前で立っていようと決心した。

左知子は……マツチの箱を手にした。

と、その時、裏の竹藪の陰から数人の男たちが走り出て来た。

「おい、止める！」

「午前一時四十六分、戸室佐知子を放火現行犯で逮捕する！」

びっくりして後を振りむいた時、左知子の小さな体は、よしずしに押しつけられていた。

支える力がないものだから、そのまま小さな縁先まで佐知子の体は飛ばされていた。

屈強な男たちは、突き飛ばされ、土の上に這いつくばっている左知子を上から押さえつけると、そのうちの一人が後手に左知子の手を捕え、手錠を掛けた。

男たちの怒号がしたはずだったが、家の者は誰れも起き出しては来なかった。

どこかに秘密パトロールの車が隠されていたとみえ、間もなく左知子は、がっちり両脇を固められ、座席の中央に乗せられた。

パトカーの吹鳴音はなかった。

ただ、闇の中を、のっそりと左知子に乗せたトカーは動き出した。男たちは「このやろう」誰れか一言発しただけだった。

大捕物をしたつもりか、無線が本部に送られ

ている。空しく、その一部始終を佐知子は聞かされていた。

「張込中の放火容疑者を現行犯逮捕、身柄を確保しました。只今より本署に向います」

左知子をはじめから網を張られていたのであった。

その罨の中に自ら身を投じたのである。

男たちの咄嗟の行動は、見事なほど機敏であった。

5

相次ぐ放火事件のために、夏の宵、それでも査本部は相当の警官の数を割いてはいた。

大きな火事と言えば、県立女子高運動場裏の老人夫婦のバラック小屋と、今度の新築半ばの家屋の火事ぐらいのものだった。

特に七月から八月の初めにかけては、老人夫婦のバラック小屋が少し派手に燃えたただけで、あとは、ぼやに等しい小さな火ばかりだったので、余り真剣には取り組んでいなかった。

それに時刻が午前二時頃までに大体集中していたので、酔っ払いの男のいたずら放火と警察は見ていた。

自警団組織も出来たが、家をまるまる焼かれたというわけではなかったのでお互いの情報交換はすることになったが、結成十日間、八月の半ばには何となく夜回りの回数も減った。

一度、匿名で警察に電話が入った。

電話したのは田尻義和だった。山岸拓郎に一度取調べてみたかどうか」と密告まがいの汚ない手を使って通報した。

「毎晩毎晩、家を抜け出して行くのを見た人が

いるそうですよ。戸室左知子が絶対に放火犯人だとわたしは踏んでるんですがね」

「それであなただはどなたです。重要なことですから交番にでもおいでになってもっと詳しいことをお教え下さい」

と、交番の警官が答えると、小心者の田尻は慌てて電話を切った。

電話は公衆電話ボックスからだった。

この手の電話は多いので、一応、捜査資料の一つには加えられたが、警察はまだ内偵にまでは出ていなかった。

他にも、挙動不審者の情報はかなりあって、手が回らなかったのが実情である。

中原町と六軒町の境目にある建造中の家が半焼した時、また、戸室左知子の名が浮かび上った。あいにくと、この建造中の家は、あの桑原源吉の、今度結婚することになった孫息子の家で、また桑原老人は探索癖を出して「ぜったいにわしが放火犯人を捕まえてやる」とみんなに吹聴した。

火災現場に、これは警察も確認したことだったが、一匹のどぶねずみの焼け焦げの死体があった。このねずみの焼死体は、外の土の上に転っていた。火を投ぜられ一気に駆けたねずみは、マークポイントの火の場所に第二の火を点火したのち、そのまま、まだ生命の限り駆け、土の上まで走ったのだった。

つまり、安住の地を土の上としたばかりに、殺されたねずみの死体は一つの証拠をこの世に残したのであった。

なお、悪いことに、ねずみ獲りの錆びた鉄籠も、現場に残されていた。

この時、佐知子は拓郎の下半身のふくらみにばかり気を取られていた。

お互い、火の遊びは、性への熱い思いによって支えられている。少なくともそのような心の屈折を二人は持ち合わせ、ていたということと言えた。

三日月橋下で左知子は、桑原老人に、鉄籠に閉じ込められたどぶねずみを持ち歩いている姿を目撃された。

それでなくとも、初めからそりの合わぬ二人だった。左知子はこの老人に嫌われていた。

左知子だって鬱陶しさを持ち続けて来たのだ。どぶねずみの焼死体と、小柄で意地の悪そうな女、それにまだ桑原老人は、左知子には意趣返しをしていなかった。

嫌な女のことや頭にあった上に、自転車の荷台で見かけたどぶねずみ、しかも、わが孫息子の領地内でそのねずみは死んでいたのだった。

桑原老人は早速のこと、警察に戸室左知子の所在を知らせた。怪しい女には違いなかった。

「あの女なら絶対にする。わしは何回かあの女を夜の街で見かけたこともある。近くの親戚の家に行っていた夜、あいつ、咽喉が渴いたのか表通りで缶ジュースを買ってた。一人でな。考えてみればほら、中原町の小学校の物置きが燃えた夜じゃったよ。あの眼付きはな、犯罪者のもんだ。だいいち、あのどぶねずみ、嘘だと思うなら近所のガキ共にも訊ねてみればいい。は、これはまたわしはお手柄で表彰されることになるな」

桑原源吉からの情報でやつと警察は動いた。

同時に、川越署に留置され、取調べられている山岸拓郎が、サトウエツコ^三のことを口にした。左知子が、拓郎の家の空の犬小舎に火を付けた時、消防署の男は拓郎のそばにいた小柄の女を覚えていた。

実はその小柄の女が、桑原老人の孫息子の家が放火された時、現場にいたことが後になってわかった。

近所の誰れかがたまたま火事現場を撮ろうとして何枚かの写真を撮った。

その中の一枚に、小柄な女が捉えられていた。放火犯は大抵は自分が火をつけた現場に立ち戻る習性があると言われている。

左知子にはそんな習性は今までなかったが、この時だけはたまたま現場に戻った。

家に帰り、父親の妙な女姿を見るのが嫌だったからだ。いや、何よりも、ファイヤーゲームの主人公に擬した一匹のどぶねずみに、左知子は報復されていた放火現場には、ほとんど証拠というものが残らない。

現行犯逮捕が求められるのに、左知子は、焼け焦げのねずみの死体と、ねずみ獲りの鉄籠を現場に残してしまったのだ。

拓郎はサトウエツコという女が実は戸室左知子だと知らされた上で、火災現場の写真を見せられ、この女が拓郎と一緒にいたことを追及された。その上で、次の火災を防ぐために、拓郎は協力を求められた。

「いいか、火事というものはボヤでもどういう風向きで大火事になるかも知れん。それで家を焼かれるだけならまだしも人だって死ぬことがあるんだ。たとえ、戸室左知子がお前の恋人だとしてもだ。絶対にそれだけはな、お前、体を張っても止めさせなきや駄目だぞ。幸いと言っちゃ何だが、これまでのところは連続放火事件としてはまだ大きな被害が出ていない。お前だって協力しておけば直ぐにこんなところからはな、出して貰えるんだぞ」

取調室で刑事に搦め手で来られた。それで山岸拓郎は『仙波町の斉木和彦・美里の家』の口を口にしてしまった。ほんとうはしゃべるまいと思っていたが、彼が捕まった日の火事が、中華料理店の単たる火の不始末だったと取調官に知らされたことで、彼は忠実義務が履行されなかったことを、知ってしまったのだった。

罰則事項を用意しなかったらこれまでの放火のすべてが自分の罪にされてしまいそうに思えた。それで、彼は、サトウエツコの次の対象物である仙波町の斉木和彦の家のことを取調官に告げた。

あくまでも、現行犯逮捕するために、夜、刑事が二人、戸室左知子の家の周囲に張り込んだ。隣家の植込みにいた一人が、左知子が家を出た時に署に連絡し、そこから仙波町の斉木和彦の家の周辺を固めるよう指示が出された。

もう一人の私服刑事は途中まで自転車であとを尾けた。方角は明らかに想定通りだったので、途中で待機していた隠密パトカーがバス路線に沿ってゆっくりと左知子のあとをつけた。

無灯火のパトカーであった。

弁財天の近くまで行き、そのあとは連絡員だけを車に残して、見えつ隠れつ、左知子のあとを追った。

まんまと、左知子は警戒の輸の中に、単身、身を投げたことになる。

その時、斉木和彦・美里は赤ちゃんを連れて母家に逃げていた。事前に、戸室左知子の不審行動について、和彦と美里のところには刑事が調べに来た。

たしかに左知子はどこか正気の部分を失なっていた。

「わたし放火犯人にまちがわれているの……」

「ほんとうに火をつけそうなの、救けて！」

そう、佐知子が口にした一切を刑事に告げた。それから美里は「赤ちゃんの匂いって好きじゃないのよね。母乳の匂いって胸が悪くなるんだもの」と露骨に言われたことや「和彦にさ、わたしマフラ編んであげたの」と言った見当外れの狂い様のことも、刑事の聴取に合わせ答えた。

みんなが、火を付けに来る女のことを知らぬ顔をして、待ち受けていたのであった。

あの立退きを迫っていた不動産屋と金融業の男の二人も、放火容疑者の女のことを聞かされた。十日間の余裕を与えたことも、他所にアパートを用意したというのも嘘だった。

二人は成り行きを見守っていたのである。

川越署の建物は古く、震災も受けていないので地下の留置場はかなり陰惨な感じであった。

捕えられた夜は一時、雨が止んでいたが、夜明け頃、左知子はまた雨の気配をおのが身で感じとった。

どこか遠くで、かすかにかすかに雨が降り始めていた。雨音が聞えていたわけではない。

三畳間ばかりの独房のまわりは薄汚れたコンクリート壁であった。高い天井にがん灯型の傘に守られた裸電球が一つ灯っていた。

九月に入ったばかりの日のことだったが、コンクリートの部屋は独特の冷たさをそこに住まわせていた。

いや、その冷たさのせいばかりではなかった。眼には見えない遠くの山野に、すでに、しずしずと雨は降り始めているのであった。

なにより、左知子の下半身の病巣部に不快な思いが伝えられていた。わずかな湿気だったがもうじゆくじゆく病巣部に雨の微粒は染み込

んでいるのかも知れなかった。

「ああ、また雨だなんて……わたしこの街がほんとうに嫌いになったわ。わたしが死ぬまでじとじと雨が降っている気なのかしら。どうしてそんなにわたしをいじめるの……」

三白眼を壁の汚点にじつと向ける。腿をしつかり内にと閉じていた。

もう、どんな男にも脚を開いてやらないと心に誓った。ああいう行為、あれって、ナニと、自らも解せぬ文句なども口にしていた。

はつきりと左知子は遠くの雨音を聞きとっていた。これからは秋の雨だった。

どこまでも物静かに、音さえ立てぬようにして、止むこともなく、秋の雨は降り続く。

左知子にはその陰々滅々の霧雨の季節の訪れが痛いようにわかった。

おのが身にその雨の微粒は降り積もるようにして降るのだった。嫌な季節がやって来るー。

戸室左知子が捕えられた翌々日、連続放火事件の捜査本部は一件落着を祝って、解散式を行なうことになっていた。

地道な捜査だったがそれでも専従の捜査員は七名もいた。続いて二名の有力容疑者を現行犯逮捕した。お手柄というべきだった。

この場には自警团组织を組んでくれた街の協力者も呼ばれることになる。

九月四日の午後一時、予定では茶碗酒だったが日本酒で乾杯をし、解散式を一応は行なうことになっていた。

だが、急遽（きゅうきよ）中止された。

その日の朝、連続放火事件捜査本部はまたまた色めき立った。

「おい、第三の放火犯人がいる！」

居合わせた者はみんな愕然（がくぜん）とし

て色を失なつた。

九月四日未明、解散式の行事を嘲笑うようにまたまた放火事件が発生した。

被害者宅は田尻義和、半焼の被害に遇つた。

便所の羽目板に沿つて火は登り、平家建ての木造家屋の浴室と玄関側の部屋に火はのり移つた。明らかに放火だつた。

この場限りの話として、新たな放火事件の一部始終を知っているのは、一人しかない。

戸室梯吉は、夜半一人で外まで這い出し、やつとの思いで、火を付ける準備をした。

二階の鏡台の抽出しからマニキュアを落す除去液を持ち出した。予め蓋は外しておき、代りに新聞紙で詰栓をした。その詰栓には糸を巻きつけ、その端は長く伸ばしておいた。

菊の花の添木にしていた竹の棒で、その、除去液の入つた容器を、隣家の便所の下にまで押しやる。横倒しになつた容器は、その場所に立てかけてあつた。飴製造の時に使つたらしい古い餅箱の横に転つていた。

梯吉はひび割れたコンクリートの隣家との境界線の上で腹這いになつていた。

主に手だけを使った。

容器の位置を定めておいてから、強い引火性を持った入れ物の詰栓の糸を、竹の棒の先からめてから引つ張つた。

百ミリ入りの中型壺でほぼ一杯入つていたので、かなりの量があつた。

揮発性の匂いが漂う。

もう一つ、予め用意してあつたものがあつた。一本の糸に結びつけておいたくしゃくしゃに丸め新聞紙で、梯吉はその新聞紙にマッチで火を付けた。

まるで釣糸を垂れる釣師の姿だつた。

腹這いになったまま、火の付いた新聞を、除去液のこぼれたあたりに近付けた。

ぽっと、瞬時に火が付いた。

火種の新聞紙は手元に引き寄せる。釣糸を操る要領だった。新聞紙は固く丸めておいたので火はそれほど燃え移っていない。

糸を切ってから、竹の棒でまた火が立っている場所にその燃えさしの新聞を戻した。

新たに火の手が上がる。

それから梯吉は、ごそごそと這い、勝手口の扉の縁に中腰の姿勢で掴まった。

台所の流しにやつと立ち、蛇口をひねって石鹸できれいに手を洗った。

着ていた作業衣を捨て、いつもの汗臭い寝巻に着がえる。もう、敷っ放しの蒲団の中にいた。テレビをつけると深夜のお色気番組が始まっていた。話題のポルノ映画の予告版で、かなり濃厚なシーンが次々と映し出される。

ともかく、自分が火を付ければ左知子は帰って来ると思った。

連続放火魔なんかじゃない。見ろ、ここにも放火犯の一人がいるんだから隣家が放火されたと知れば、警察は別の犯人を、また追求しなければならなくなる？

だが、梯吉は自分が足腰立たない身であることをなによりも自分の武器とした。

両肘を使って這うことは出来ても、隣家の壁際まで身を擦り寄せることは不可能な体であった。少しずつ、足の萎えは回復に向っていたが、そんなことは誰れも知らない。

放火犯人としての条件を欠いているはずだった。いや、いつそのこと、火がここまで類焼してくるならば焼け死んでやってもいいと思っていた。

芳枝がいなくなり、今また左知子までも奪われ、しかもこの家は数日を経ずして人手に渡るのであった。まして、この家を隣家の田尻義和が買い取る話など、とうてい、梯吉には我慢の出来る話ではなかった。

酒の上での諍（いさか）いもあったが、梯吉は毛虫のように嫌われた身であることを知っていた。梯吉には直接話さなかったが、左知子を通して何度か買取りの話を持込んで来たのを彼は左知子から聞いて知っていた。

こんな男に渡すものか、近親憎悪にも似た怒りを梯吉は持った。

火を付けたのもそんな感情があつてのことである。左知子がこの家から居なくなることを怖れるばかりに、わが娘の夜の散策を赦した。

何をしていたのか、薄々とはわかつていたが、つきつめて考えるのを止めた。

それは父と娘との共同生活が破綻することを意味していた。

黙っているより仕方なかった。

せいぜい梯吉に可能だったのは、いかげんにしろと脅し文を他人に似せて発することぐらいしかなかった。

第三の放火犯人は、ただただ、この日、火の騒ぎが起るのを待った。

乾いた便所の板壁に火が移るのは早かった。

傍らの古い餅箱にも火は伝わり、六畳間から首を伸ばすようにして勝手口のほうを見ると、ぼおーと外が明るくなっていた。

ばちばちと木の爆ぜる音がした。

中途半端な姿勢で火事の成り行きを見守っていたのに、大きな火になった時、梯吉の背筋はびんと立った。騒ぎが大きくなった。

田尻義和が起き出してきて「火事だ！火事！

だ！」と近所に触れ歩いた。

梯吉の右手の人差指はねずみに噛られた時の後遺症でまだ第一関節から曲がったままだった。このまま治らないかも知れない。

もう罰は受けていたのだった。

ますます騒ぎは大きくなる。

梯吉の胸はどきどきした。深夜番組のテレビなどもう見てはいなかった。

生きた人間たちが、原寸のままの姿で外では立ち騒いでいる。それこそが生きたドラマともいふべきだった。

（第七章 了）——全巻・完